

氏 名	マツ シタ マサ トシ 松 下 雅 寿
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 286 号
学位授与年月日	平 成 22 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉水の風景画 〈論文〉〈引き立てる・主になる〉黒
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (美術学部) 手 塚 雄 二
(論文第 1 副査)	〃 〃 ( 〃 ) 田 口 榮 一
(作品第 1 副査)	〃 准教授 ( 〃 ) 吉 村 誠 司
(副査)	〃 教 授 ( 〃 ) 関 出
( 〃 )	〃 〃 ( 〃 ) 梅 原 幸 雄

## (論文内容の要旨)

## 序 章

絵を習い始めた時、用意して来る物と書かれていたのは、画用紙と鉛筆。それは絵画に限らず、大体の着想を描き表す下絵に必要な白と黒。大学での最初の講義は墨の種類、油煙墨、松煙墨の説明、続いて白色系顔料・胡粉の使い方、さらに日本画で用いる紙や雲肌麻紙の話であった。これらは材料の白と黒の説明であった。そして、日本画を制作する上で始めに行う、紙に対象の輪郭を墨で引いていくという骨描きだった。つまり、絵画の始まりにあったのは、いつも白地に黒で描くこと、黒を主として使い、黒を見せることであった。そこから、絵画の基本は「主になる黒」ではないかと考える。

絵画だけに限らず、一般的に黒はよく使われている。本・手紙・楽譜・書道などに黒を使い、使われている理由は、白と黒の対照によって明暗がはっきりし見やすいためだと考えられる。そして、その逆も考えられる。黒地に白で描くこと、夜空に月や星が見えること、夜景や街灯などの場合、明るい色がメインであるとも捉えられるが、黒があつてこそ明るさが引き立つ。それを黒が引き立てていると見ることもできる。これを「引き立てる黒」と考える。

私は日本画画材屋の絵の具棚の中で黒が一番美しいと感じた。そして、綺麗で高価な群青や緑青も焼くことで黒く変色することを知り、日本画の黒と今まで触れてきた黒に違いがあると分かり、興味を持った。

明暗を表すのに必要で、ときには主となり、ときには引き立て役となる多様な黒が何なのかと自問していく過程で、自身の作品において黒を水の風景画に組み合わせることで、黒が画面にどう生きてくるのかを考えていく。

本論は数ある黒の画材料の研究や黒のイメージなど黒について様々な角度から「黒」を読み解き、絵画における黒の本質に迫ろうとするものである。

## 第 1 章「黒」

黒という色が暗示する意味には、良いものと悪いものの両方がある。高貴・重厚・格式といったポジティブな意味とともに悪・死・恐怖といったネガティブな意味をもっていることからわかるように、黒は多様なイメージを含み、見る人によって捉え方が異なる。このように、見る人次第で意味が変わり、想像を掻き立てる黒は不思議である。さらに、宇宙を連想する人も少なくない。万物を包容する空間、

無限の広がりを表す神秘的な色とも考えられる。

その黒を茶の湯の世界で至極と称した人物がいた。それは天正の時代、織田信長、豊臣秀吉の「茶頭」として活躍した千利休である。利休の黒に対する美意識、空間演出、色彩表現から、自身の作品にどう生きてくるのかを模索していく。そして利休の黒などから、  
〈引き立てる黒〉とは何かを、考察していく。

## 第2章「水墨画」

水墨画は一般的に、紙や絹の白と墨の黒といった二色で構成されている。だが黒には墨の他にも、日本画の絵の具を挙げるなら、天然の群青や緑青などに熱を加え黒変させたもの、そして銀箔を硫黄と化学変化させ黒変させたものなど様々な黒がある。墨も黒も大まかにいうなら同じ色である。しかし、それらは区別される。なぜ分けられるのかを自問し、墨と黒に迫っていく。そして、紙や絹などの白地を残して、白を見せる水墨画の精神性などに言及しながら黒の奥深さとは何かについて考察していく。

さらに第1章で述べた〈引き立てる黒〉とは反対の見え方、つまり、相対的な明暗・濃淡による〈主になる黒〉について考察し、水墨画を例に無彩色の可能性について考えてみたい。

## 第3章「水・彩」

ここでは自分の表現において黒と並んで重要である、水と彩という二つのテーマについて述べたい。水にも黒と同様に、静けさと激しさ、冷たさと温かさといった、対照的な意味を見出すことができる。水を主題にした絵は、世界中で描かれている。様々な絵画の例を挙げ、なぜ水の絵が描かれるのかを考えていく。そして、水は主題になるだけではなく、絵を描く際に必要不可欠な存在であることを述べていく。

水墨画と呼ばれる作品の中にも地に金箔、銀箔を用いたものがある。それは白と黒だけでは表現に限界を感じたためなのか、そもそも水墨画とはモノクロームの作品のみを指すものなのか。水墨画における色から、白と黒、彩とは何かを探っていく。

## 第4章「作品」

前章までは、黒の持つイメージの多様性について触れ、利休の黒に見られたような質の違い、五感に働きかける黒の可能性などを述べてきた。

自作をとりあげ、水、黒、彩、風景の4つが、現在、自分が作品を制作する上での重要な要素であることを説明する。

### （博士論文審査結果の要旨）

申請者は、同時に提出された研究作品に明らかなように、ほとんど黒一色で水辺の景観を描き、黒の明暗豊かな階調によりそこに大気や光り溢れる空間を、あるいはそれぞれ微妙な質感に富む黒い岩肌と滔々たる水面を対比させながら雄大な自然に潜む神秘を暗示させるなど、黒を基調とする意欲的な作品を次々に発表している。

本論文は、そのような黒についての自らの限りない愛着を動機とし、黒のもつイメージや精神性さらには画材としての種々の黒の考察などを通じ、また作品の自己検証を踏まえて、絵画における黒の本質と可能性を探究したものであり、創作と自意識の間を往き来しつつ纏め上げた論考である。

良悪両様のイメージを持ち、さまざまな想いを包み込む黒は、しかし毅然とした揺るぎない存在であり、待庵や黒楽茶碗の黒に無限の価値を与えた千利休の美意識を日が暮れてから行われる茶会、夜咄で追体験した申請者は、中日の水墨画の鑑賞を通じて黒と白のモノトーン画面に深い精神性を感じ取りつ

つ、現代の水墨画の有り様、とりわけ画材としての黒が墨だけではないことを論じ、墨と墨以外の、焼いた岩絵の具の持つ輝きや凹凸などの厚み、染料系の黒の透明感、黒く変色させた金属などさまざまな黒の表現力の豊かさを引き出し、そしてそこに材料としての水を巧みに用い、彩をわずかに添え、あるいは黒と黒を写し出す素地（白）とのバランスに配慮しながら、水辺の風景を描くことで自然の奥深い本質に迫ろうとする。水墨画をも超える黒を求めて創作を続ける申請者の模索と思考を率直に綴った好感の持てる論文として高く評価される。

#### （作品審査結果の要旨）

絵画を制作する過程でぶつかる問題点の一つに「黒」の明暗の濃度、「黒」の彩度がある。申請者は画面の中に最も彩度の高い「黒」を作ることによって階層を広げ画面を複雑にし、作品の中に深みと広がりを見せている。「黒」そのものが明るいものである場合には彩度の幅が狭く見え、逆に暗い場合には周辺の色彩が中間色に見えるが、申請者はその深く暗い「黒」をさらに申請者自身の作品の中で追求している。「黒」を基調にした申請者の絵画構成はモノトーンに置き換えた場合、明暗の対比が最も際立つよう構図にも配慮されている。「白」の分量、「黒」の分量や割合比、言うならば作者独自のバランス感覚を計算して最も美しいと感じた白黒に準じたものであると言えよう。特に提出作品「渚煙」は薄塗りではあるが、幾度も絵具を薄く塗り重ねることにより作品に深みを出し、精神性や情感が表現された好感が持てる秀作である。一度ではなく何層も薄く塗り重ねられた申請者の「黒」はさらに深みが増し、その深みは“茶の湯”を参考、及び研究して得た「黒」に対峙する努力の賜物であると考ええる。黒楽茶碗の「黒」を熱心に、また、追求する姿勢は大いに共感が持て、高く評価したい。しかしながら、作品「閑情」に見られるようなマチエールの作り方は、作品「渚煙」のような何層もの諧調の「黒」を薄く塗り重ねることで突き詰められたそれとは異なり、厚塗り部分の表現方法にいまひとつの工夫がほしいのもまた事実である。

作画過程において「黒」という色彩の探求を着実に実行し、「黒」を基調とした作品としての一方向を明示している。また、構成の基礎となる素描を数多く行い、彩色方法における独自の技術の研究と集中力によって完成度を上げていく持続力には感心させられるものがある。

各作品共に完成度も高く、足元をしっかりと見つめ、常に高い水準まで持っていくことの出来る集中力と感性は高く評価出来る。作者独自の色の発見は風景を描く時にも活かされ、「黒」という色調の中に、作者の心情とデリケートな感覚を垣間見せ、心の内側を凝視する姿勢も獲得しつつあるようだ。白から灰、そして「黒」へと展開する世界は、繊細かつ大胆な表現とも言え、十分に価値の高いものである。

今後は現実からだけではなく、無から有を生み出すような精神性がさらに増すことを望みたい。さらに、申請者の感覚が研ぎ澄まされ生じる叙情感・幽玄さが、今以上に作品に表れることを期待したい。

以上の理由により、申請者の将来の希望を込め、2010年1月14日、主査、副査である日本画研究室教員の4名、及び論文担当第一副査、田口榮一教授と共に審査委員会を行い博士学位授与に値すると判断し合格とした。

#### （総合審査結果の要旨）

松下君は、修了課程の頃から黒を基調に風景の制作に取り組んできた。修士の頃の作品は、自然な空気の中に黒が溶け込み、彼独自の泥臭い匂いによって平凡な風景を非凡な雰囲気のある絵画へと導きだしていた。博士課程に入ってから、黒の魅力に引き込まれ、黒という素材についての研究的制作を重ねてきた。彼は自分の絵について「茶の湯の世界のごとく水墨画の雰囲気を少し分かりやすく見やすく光を当てた絵である。」と言っている。黒に精神性を感じ、白との対比で絵造りをしている。絵画における表

現の基本は、黒と白、明暗で成り立っている。この代表が水墨画である。白黒が根本である証明は、色鮮やかだった古画が時代を経て劣化し、モノトーンに近づいてきてもその良さを失わず、より深みを加え残ってきている事からもわかる。内容が良ければ、その絵画は時代を経ても色あせることは無いのである。しかし、色味は絵画にとって潤いや華やかさを与え、モノトーンだけでは表現しきれない新たな可能性を秘めている事も事実であろう。彼の黒という色についての論文には、独自の新たな発見は見当たらない。が、黒に対する深い研究は、異なった素材の黒による実験的制作を行うことにより院展に入選する等、一つの結果を出している。しかし、黒というテーマを掲げ研究して行くあまり、平凡な風景を非凡に表現した、以前の「黒を見せる」又は「黒で見せる」絵画というより、平凡な風景を黒く描いた作品に見える。博士課程に入り、技術の向上と見せ方の巧さが以前の泥臭さを消し洗練された画面へと変わってきた。これは、絵を勉強していない人にとっては居心地の良い画面となっているに違いないが、絵画としてはある意味平凡になったように見える。ただこの先、洗練された画面と彼の心の内から発する黒が融合した時、非凡で誰もが認める作品になるのではないだろうか。そして、最近の作品「渚煙」では、その予感を感じさせる作品となっている。

黒を追求してきた彼の熱意と実績に対し、そして将来への希望を込めて全員一致で博士号に値すると考え合格とした。